

たたら製鉄遺産を活かした人づくり

西岡章寿

一 はじめに

兵庫県の中西部に位置する宍粟市は、平成一七年四月一日にそれまでの宍粟郡山崎町・一宮町・波賀町・千種町の四町が合併して誕生した。市全体の面積は六五八・五四平方kmで、東西方向約三二km、南北方向約四二kmの広がりを持ち、兵庫県内では豊岡市に次いで広い市域となっている。

市域の東西には中国縦貫自動車道が、南北には国道二九号が通じ、近畿地方と中国地方、山陽と山陰を結ぶ播磨内陸部の交通の要衝となっている。また、市の中央には、播磨と但馬の国境に源を發する揖保川が流れ、千種町は千種川の上流域を占めている。合併当初は四万五七二四人であった人

口は、現在三万八七七八人（平成二九年一〇月末）と減少している。

少子化の影響は宍粟市でも例外ではなく、合併時に二〇校あった小学校は現在では一三校、中学校は八校から七校となっている。そのほか、幼稚園一〇、市立保育所六、私立認可保育所八、私立認定こども園二を所管している（平成二九年度）。

宍粟市教育委員会では、平成二〇年に義務教育の振興に係る長期構想及び前期基本計画として「しそうの子ども生き生きプラン」を策定した。

そして新たに平成三〇年度からむこう一〇年間の構想・計画を策定し、「夢と自信をもち 魅力あふれる宍粟の明日を担う人づくり」を基本理念に掲げ、その実現に向けて取組を実践し、心豊かで自立した人づくりのための教育を進めているとこ

ろである。

二 宍粟市の歴史と文化財

奈良時代の初めに編さんされた『播磨国風土記』によると、当時は宍禾郡（しさわのこおり）と呼ばれ七つの里があったことが記されている。

市内には古代の遺跡が数多く残されており、一宮町家原遺跡は縄文時代から中世にいたる大規模な複合遺跡で、遺跡公園として整備され、宍粟市歴史資料館が設置されている。近くには、宍粟市内で唯一の国指定重要文化財で室町時代に建造された御形神社本殿がある。また、一宮町伊和神社は風土記に現れる伊和大神の本拠であり、平安時



家原遺跡公園復原建物

代以降は播磨国一宮として播磨一円から広く信仰を集めてきた。

山崎町にある長水城は、中世に宍粟郡の領主であった宇野氏の居城であり、篠ノ丸城は黒田官兵衛が拠った「山崎

城」の候補とされている。江戸時代の元和元年（二六一五）には、池田輝澄によって宍粟藩が置かれ、延宝七年（一六七九）には、本多氏が山崎藩主となって明治維新まで続いている。山崎藩の陣屋跡には、市指定文化財の「紙屋門」が残されているほか、周辺ではあちらこちらで江戸時代の城下町の面影を偲ぶことができる。

市内にはこれ以外にも、多くの古墳や城跡などの史跡や巨樹・巨木などの天然記念物、チャンチャコ踊りや獅子舞といった貴重な伝統民俗芸能や農村歌舞伎舞台も保存継承されている。

三 宍粟市のたたら製鉄

以上のように、歴史と伝統のふるさとである宍粟市には多くの文化財や歴史遺産が残されているが、宍粟市の歴史文化を語るうえで欠かすことができないのがたたら製鉄の歴史である。

宍粟市の製鉄の開始については、『播磨国風土記』において野の里の敷草村（現在の千種町）と御方の里の金内川（現在の一宮町三方地区）で

「鉄（まがね）を生（いだ）す」という記事があり、少なくとも奈良時代の初めには製鉄が行われていたことがうかがえる。中世から近世にかけては、「宍粟鉄」、「千草鉄」、「千草鋼」と呼ばれ、とりわけ日本刀の原料として最高品質を誇ったといわれている。

江戸時代になると、千種町・波賀町・一宮町北部一帯で、高殿と呼ばれる建物を備え、原料の砂鉄と燃料の木炭を用いて鉄を生産するたたら製鉄の技術が確立する。

千種町西河内の天兒屋鉄山跡は、長さ約三〇〇m、幅約一〇〇mに及ぶ広大な敷地を石垣で柵田状に区画し、内部にたたら炉を築いた高殿、鉄池



天兒屋たたら公園



たたら学習館
天兒屋鉄山跡復元模型

（製錬した鉄塊を冷却するための池）、大銅場（鉄塊を砕く作業場）、勘定場（管理事務所）、砂鉄や炭を置く倉庫、山内小屋（職人や家族の宿舎）などの施設が整然と配置され、宍粟市内でも最大規模のたたら製鉄遺跡である。江戸時代の前期から製鉄が始められ、明治一八年（一八八五）ころまで操業が続けられ、最盛期には三百人を超える人々が居住していたといわれている。昭和五九年（一九八四）に行われた発掘調査では、たたら炉の地下構造が調査され地表下四mに及ぶ防湿のための工事が施されていることが明らかになった。平成一四年（二〇〇二）には、兵庫県を代表するたたら製鉄遺跡として、兵庫県史跡に指定されている。千種町内にはほかに中世の製鉄遺跡である高保木製鉄遺跡（兵庫県指定史跡）、岩野辺の荒尾鉄山跡（宍粟市指定史跡）、原料の砂鉄を採取した遺構である森の上鉄穴流し場跡（宍粟市指定史跡）などが分布しており、「たたらふるさと」と呼ぶに相応しい状況である。

四 たたら製鉄を活用した取組

宍粟市の小学校では、三年生の「環境体験」、四年生の「ふるさとしそく探検隊」、五年生の「自然学校」などを通じて地域の自然、歴史・文化などの教育資源を活用した体験活動を行い、地域の良さを伝え愛着を深める機会としている。

千種町では、子ども園、小・中・高校一貫教育の取組を進め、体育祭や文化祭などを合同で行っている。中でも、千種中学校では特色ある授業の一環として、「千種を知り、千種を愛し、千種に誇りを」をキャッチフレーズに、地域の資源や人材を活用して地域の自然や歴史、伝統文化、産業などを学ぶ「千種学」の学習に取り組んでいる。

特にたたら製鉄体験学習は、平成九年（一九九七）度から毎年中学二年生の生徒によって行われ、平成二九年度で二一回目を迎えている。

例年、夏休みの間に、宿題として千種川の河原で原料となる砂鉄を磁石を使って採集する。二期に入ると、九月には準備として採集した砂鉄をさらに純度の高いものとするため、樋に水を流し

て砂鉄と砂を分別する「鉄穴流し」という作業を行い、分離、精製した砂鉄は本番までにじゅうぶんに乾燥させておく。本番前には、事前学習として地域の指導者を招き、たたら製鉄の歴史や鉄の役割、鉄の道具の使い方などについて学びを深めている。

平成二九年は十月二六日に、天兒屋たたら公園においてたたら製鉄学習が行われた。当日は作業の安全祈願のあと、燃料の炭切りや炉のノロ（不純物）出し口の栓に使う土団子作りなどを行った。炉内に砂鉄と炭を交互に投入していくと一〇〇〇℃を超える高温となり、炉の底にはケラと呼ばれる約一〇kgの鉄の塊が出来上がる。ケラの中には銀色に光る玉鋼が多く含まれており、製鉄作業はみごとに成功した。参加した生徒たちにとっては、たたら製鉄という伝統技術や先人の知恵に触れることで地域に誇りと愛着を持つ貴重な機会となっている。

地元では有志を中心にした「宍粟鉄を保存する会」が組織され、たたら製鉄の調査研究や情報発信、他地域との交流、市民への啓発活動などを行っ

ている。また、「たたらの里ちくさガイドの会」では、たたらの里学習館の展示資料や天児屋たたら公園などのたたら製鉄関係の史跡のガイドを行っている。

五 まとめ

本市においても少子高齢化による人口の減少、集落の過疎化、地域コミュニティの希薄化の進行は深刻な課題となっている。このような情勢下にあつてこそ、地域の文化財や歴史遺産が地域の核として果たす役割にはきわめて重要なものがあると思われる。

今後とも、宍粟市総合計画が掲げる「人と自然が輝き みんなで創る 夢のまち」宍粟の実現に向け、子どもたちに地域の良さを伝え、ふるさと宍粟を愛する心を育てる取組をより一層進めていきたい。